

## ■ リポジット版・補遺（2020年）

日本病跡学雑誌に掲載された本論文（2011年）は、宮崎駿の体感体験を、精神医学用語である「セネストパチー（体感異常症）」を用いて考察した。ただし、「セネストパチーとは異なる」という論旨であり、積極的に近いと位置づけられる概念を提示したわけではない。その後、筆者は、「共感覚（synesthesia）」が、この体感体験を説明するのに適しているのではないかと考えるようになった。

共感覚とは、「ある刺激に対して別の領域の感覚が生じる現象」<sup>4)</sup>であり、共感覚者は、文字や数字に色がみえたり、音や言葉を聞いて色を感じたり、味に形が伴うといった知覚現象を体験している。共感覚の報告は古くからあったが、1980年に神経科医のサイトウィックが、味覚から触覚が誘発される一人の共感覚者と出会い、ポジトロン断層法の結果を報告したことで再評価されるようになった<sup>1)</sup>。心理学者のハリソンらは、「色聴」（音から色が誘発される共感覚）を対象とした functional MRI (fMRI) の結果を報告した<sup>5)</sup>。さらに、共感覚者自身が自らの体験を記した著書も出版された<sup>3)</sup>。2009年には、共感覚研究の第一人者サイトウィックと神経科学者イーグルマンが、これまでの研究成果を考察した解説書を出版し<sup>2)</sup>、共感覚と創造性との関連にも言及している。

共感覚は「結合した感覚」を意味し、数字や文字を見ると色がみえる「書記素→色」や、曜日や月といった時間単位に色が伴う「時間単位→色」、言葉や音楽から色が知覚される「音声要素→色」などがある。それ以外にも、「味→色」「音→味」「音→触覚」「匂い→触覚」「触覚→味」「光景→音」など、多種多様なパターンがあり、また五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）以外に、認知特性が関与する「パーソナリティ→色」「情動→色」「パーソナリティ→匂い」などもある。共感覚の成因仮説についてサイトウィックらは、「さまざまな脳領域どうしのクロストーク（混信）が多くなっている」ことが原因であり、また「先天的なものであるが、生育環境との相互作用も必要で、幼少期に文字、数字、食べ物のカテゴリーといった文化的に学習される事物に触れる必要がある」と考察した<sup>2)</sup>。脳機能画像研究（fMRI）では、「単語→色」の共感覚者を対象に、単語を聞くことによって、色覚に特化した脳の視覚領域（V4）が活性化するという所見が見出されている<sup>2)</sup>。

宮崎駿の体感体験は、怒りという情動反応を引き金にして、「身体中の毛穴から黒いどろどろとしたものが出てくるような感じ」という身体感覚（触覚）が誘発される。これは「情動（怒り）→触覚」の共感覚と考えることができる。共感覚としては稀なタイプとなるが、理論上は有り得るものであり、サイトウィックらの共感覚の定義（「引き金となる刺激によ

って、引き金とは異なる物理的属性ないしは概念的属性の知覚が、自動的、不随意に、感情をのせて、意識にのぼるかたちで誘発される」<sup>2)</sup>にも矛盾しない。

「情動」が関与する共感覚としては、「人や物のまわりに色つきの輪郭ないしはオーラが見える」という知覚現象が報告されている<sup>2)</sup>。このタイプの共感覚者は、その出所が相手だと誤解することが多いが、実際には自分が相手をどう感じているかという情動的判断が引き金になっており、以下のような例がある。「怒りは赤いと一般に言われますが、私は紫色が見えます。うちの子どもたちに本気で腹を立て、怒鳴りつけていると、子どもたちのうしろに紫色の背景が見えます。子どもたちの頭がその背景と接するところは、オーラのように、黄色の光が紫色のなかに入りこんでいます。そしてゆっくり消えていきます」<sup>2)</sup>。同様に、「鈴木さんから、黒い粉が落ちていたのがみえた」との宮崎駿の発言は、他者（鈴木敏夫）に投影された「情動→視覚」の共感覚として理解することも可能だろう。

「自分の感覚体験を他者も経験していると思込んでいる」というのも、共感覚者と宮崎駿の共通点である。宮崎駿は自分の感覚体験に関して、「自分にあるものですから、みんなに共通しているのかと思っていた」「そういうのをみんな持つてるんだろうと思ってたんです」と語っている。共感覚者も、物心ついたときには既に共感覚があり、それが誰にでもあると信じて疑わないが、あるとき自分の知覚が例外的なものだと知り、「他人が世界を知覚する仕方が自分とは異なっているのを発見して驚く」<sup>5)</sup>ことが多いといわれている。

- 1) Cytowic R.E.: *The Man Who Tasted Shapes*. Putnam, New York, 1993. (山下篤子訳：共感覚者の驚くべき日常 —— 形を味わう人、色を聴く人。草思社、東京、2002.)
- 2) Cytowic R.E., Eagleman D.M.: *Wednesday Is Indigo Blue: Discovering the Brain of Synesthesia*. The MIT Press, 2009. (山下篤子訳：脳の中の万華鏡。「共感覚」のめくるめく世界。河出書房新社、東京、2010.)
- 3) Duffy, P.L.: *Blue Cats and Chartreuse Kittens: How Synesthetes Color their Worlds*. Henry Holt & Company, New York, 2001. (石田理恵訳：ねこは青、子ねこは黄緑 —— 共感覚者が自ら語る不思議な世界。早川書房、東京、2002.)
- 4) 濱田秀伯：精神症候学。弘文堂、東京、1994.
- 5) Harrison J.E.: *Synaesthesia — the strangest thing*. Oxford University Press, New York, 2001. (松尾香弥子：共感覚 もっとも奇妙な知覚世界。新曜社、東京、2006.)